2016 年度「研究者の横顔」　古井 辰郎先生

1. 研究者になろうとしたきっかけ
卒業し、大学病院や市中病院での勤務ののち大学院、留学を経て、帰国後は生殖医療も担当するようになりました。その中で、上司の影響もあり、がん治療と妊孕性の問題を考えるようになったことが今の研究に関わるきっかけになっています。

2. 助成研究の内容紹介
がん治療による将来の不妊は、若年者の QOL を大きく低下させることになります。一方、事前の卵子や精子の凍結保存などによって、こういった問題を回避可能になってきており、こういった技術のさらなる向上、診療科を超えた医療連携、看護、心理など、多方面からの患者支援の方策を検討することを目的とし、基礎研究から看護、心理関連学会との協力による専門スタッフ育成、医療従事者および一般への啓発活動などを計画しております。

3. 2 の将来に繋がる結果予想・目標
基礎研究からは精子、卵子の凍結技術、卵巣組織凍結および自家移植の効率改善が期待される。さらに、がん・生殖医療連携の全国展開により、全国的に均質化された医療連携システムの構築を行うことを目標とする。

4. 全国の RFL 関係者に一言
この度はご支援ありがとうございます。がん診療と生殖医療の異なる分野において、効率的で質の高い医療が提供できるよう、微力ですができる限り頑張ります。